

2015（平成27）年度 東京大学 入試問題 第4問（文系） 解答例

一 猫の世界で自然と一体化して自立した猫の見事な親離れは、生き方のシステムが不変で、安らかな感銘をもたらすということ。

* 「悠久の安堵感」「打たれる」などの解答表現も忘れないこと。

二 筆者は、野生の掟により猫の寿命は短いとは思ったが、苦しむ様子に自責の念から家に入れ、同情して居着かせたということ。

* 「死ぬべき」の意を正確に解答化したい。「野生の掟」にしたがえば、短い寿命の猫である、ということである。

* 「生かしてしまった」に対応する本文内容は、「～しまった」に着眼すれば、見出しやすい。単に「助けた」「世話した」というのみでなく、その後も「そのまま家に居着かせてしまった」のである。

三 筆者が汚く臭い病猫の面倒をみるのは、無償の愛ではなく、猫に心を拘束されたからだ、かすかに察しだしていたということ。

* 「それ」「こんなもの」「そういうこと（ではなくて）」が基本的な解答ポイントであるが、この時点での説明として、誤って「慈悲の気持ちが引き出された」を用いないこと。そういう理の勝った「解説」は、「それから二年間」「つい最近」、猫を看取って後の「省察」によるものであろう。この設問三は傍線部そのものには書かれているとおり、「薄々感じはじめていた」段階の筆者の意識であって、深読みのつもりでの誤読をせぬように。

四 病猫の死後、覚えず不快なはずの臭気を懐かしみ、猫に人間の慈悲心を引き出される輻輳した関係性の妙を感じるということ。

* ①・④は、必須ポイント

① 「不思議なものである」という感慨が、「二者間の輻輳した契約」により、「猫に人間の慈悲の気持ちを引き出され」という関係性の妙である。